

# 音楽科における大学と附属中学校の連携についての研究

日吉武\*・遠矢圭祐\*\*

(2022年11月16日 受理)

## A Study on Cooperation in University and Middle School Attached to the Faculty of Education in School Music Education

HIYOSHI Takeshi and TOYA Keisuke

### 要約

鹿児島大学教育学部音楽科では合唱の講義を開講しており、学習成果発表の場として演奏会を実施している。新型コロナウイルス感染症の影響で開催が一時途絶えてしまったが、隣接地にある鹿児島大学教育学部附属中学校に連携協力を求め、2021年度前期より25分間のミニコンサートとして実施することができている。

そこで本実践研究では、大学（教育学部音楽科）と附属中学校が連携して取り組んだ合唱ミニコンサートや附属中学校研究授業への演奏映像提供の取り組みについて、ICT機器を活用した遠隔実施と感染対策を講じて行った対面実施の比較等を通じて考察し、取り組みの成果と課題について検討した。

検討の結果、中学生を対象とした演奏会の選曲では、中学校の要望を調査した上で選曲することや生徒へのアンケート結果を取り入れた選曲をすることに有効性があること、遠隔実施と対面実施のそれぞれに有効性があり両者の利点を生かし合うことで更に充実した取り組みになること等の示唆を得ることができた。

**キーワード**：合唱、選曲、遠隔と対面、ICT機器の活用、大学と附属中学校の連携

---

\* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 教授

\*\* 鹿児島大学 教育学部 附属中学校 教諭

## 1. はじめに

鹿児島大学教育学部音楽科（以下「学部音楽科」という）では、声楽分野の講義として、前期に合唱A、後期に合唱Bを開講している。これらの講義は学科の基礎共通科目に位置づけられており、中等教育コースでは必修科目となっている。一方、初等教育コースでは選択科目であるが、専門科目の単位の一部として多くの学生が受講している。2021年度前期より日吉が本講義の担当者となった。

合唱ABでは、講義のまとめとしての成果発表として、日吉担当以前より学外ホールでの演奏会開催や公立小中学校への訪問演奏を行っていた。新型コロナウイルス感染症の流行が始まったことにより残念ながら2020年度は未実施に終わってしまったが、可能であれば感染対策を講じた上で学習成果発表としての演奏の機会をつくりたいと考え、鹿児島大学教育学部附属中学校（以下「附属中学校」という）\*1と連携し、ミニコンサート（附属中学校では「合唱鑑賞会」）等を実施することとした。附属中学校側の連携の主体は音楽科教諭の遠矢が担っている。

今回は、2021年度前期と後期、そして2022年度前期の合唱ABの講義の教育実践と、計3回実施したミニコンサート、加えて2021年度後期の合唱Bの講義内で附属中学校音楽科の歌唱授業と連携した教育実践について、その成果と今後の課題を報告する。

## 2. 合唱A、合唱Bの概要（2021年度以降の概要）

合唱ABは、毎週木曜日の第5限（16:10～17:40）で開講している。前期後期とも、それぞれ1回90分、全15回の講義である。

講義内容の設定にあたっては、次の点を考慮した。

- ・将来教師となった時に教育現場で活用できる合唱準備と発声練習そして指導法を体得できること。
- ・異なる演奏形態、異なる曲種の合唱に取り組めること。
- ・学生主体の活動が含まれること。

また学習成果発表の場としてミニコンサートを行うこととした。これについては、次の条件を踏まえ企画した。

- ・合唱講義の曜日と時間帯の中で開催できることを目指すこととし、附属中学校カリキュラムの木曜日16時に設定されている「RT」（略称 Ruriiro Time）の時間をミニコンサートに当てること。
- ・開催日は合唱講義の第14回目か第15回目となるよう調整すること。附属中学校の行事等の状況で開催日が早い時期の設定となった場合は、コンサート前の時期の他曜日第6限に補講を設定するなどして調整すること。
- ・RTが25分間ということなので、その時間内に演奏時間が収まる選曲とすること。

以上の条件等を踏まえ、講義内容は次のようなものとなった。

- ・学生に役割を持たせ、主体的に取り組む場面を作った。役割分担は以下のようにした。  
インスペクター：活動の統括。ミニコンサートの企画。プログラムの作成の中心。  
サブインスペクター：出欠の把握。インスペクターの補助。  
パートリーダー：パート練習の統括。インスペクターの補助。  
ピアニスト：演奏曲の伴奏。パート練習の補助。
- ・講義開始時にストレッチと発声練習の時間を設け、受講学生が交代で担当するようにした。
- ・混声三部合唱、混声四部合唱、女声三部合唱、男声合唱の楽曲を選曲した。
- ・西洋の合唱曲、日本の合唱曲、主に中学生向け教材として作曲された合唱曲、ポップスを編曲した合唱曲、本学音楽科の作曲担当教員作編曲の合唱曲等、多様な曲種の選曲とした。
- ・演奏曲について附属中学校の要望を調査し、選曲に反映させた。  
(なお本報告で扱う3回のミニコンサートの具体的な選曲については資料1を参照のこと。)

### 3. 附属中学校の音楽授業と合唱活動の概要

授業では、毎時間の始まりに、歌唱活動に必要なストレッチやブレストレーニングを生徒主体で行っている。また、導入時にも歌唱活動を多く取り入れている。年間を通し、文化祭や卒業式などの行事に向けての合唱練習においても、毎時間の課題を学年に応じて設定し、各自が個人目標を定めながらよりよい合唱を創り上げようと実践を重ねている。

「歌に始まり、歌に終わる附属中」として、朝の会や帰りの会でも合唱活動に取り組む習慣があり、音楽科だけでなく、学校全体で合唱活動に積極的に取り組む姿勢を持っている。新型コロナウイルス感染症が拡大してから思うように合唱活動を行うことができていない\*2が、ICT機器を活用するなどして、合唱活動における学びを止めないように取り組んでいる。学部音楽科との連携もその一つとなっている。

## 4. 実践の概要

### 4.1. 2021年度前期・合唱A

#### 4.1.1. ミニコンサート計画案及び計画の実際

実施期日：令和3年7月15日（木）RT（16：00～16：25）

場 所：体育館 ⇒ 多目的ホールより放送し、各学級におけるTV鑑賞（live）に変更。

実施形態：対面 ⇒ ライブ配信

対 象：第1学年（178名）

演奏曲目：Ave verum corpus、麦藁帽子、箱根八里、鷗、虹

事後活動：Google フォームによるアンケート実施

#### 4.1.2. 附属中学校より学部音楽科への依頼事項

新型コロナウイルス感染症拡大のために、卒業合唱等を経験せずに入学してきた生徒がほとんどであった現状を踏まえ、「歌で始まり、歌で終わる附属中」の歴史を途絶えさせないために、生の合唱を鑑賞させる機会を設けたいと附属中学校音楽科では考え、合唱鑑賞会開催を依頼した。また、プログラム構成において、生徒が合唱活動に、より興味・関心を持てるよう、音楽の美しさや有用性を感じられる作品や、より親しみを感じられる選曲を依頼した。

#### 4.1.3. 実際の演奏発表について

当初対面形式での計画であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況を受け、急遽ライブ配信へ変更し、生徒は各学級に設置された TV モニターで鑑賞を行った。できるだけ生演奏に近づけるように、コンデンサーマイクを使用し、ミキシングを行い配信した。また映像に関しても、ビデオカメラを複数台用いて、スイッチャーを利用することで放映映像に変化をつけた。これらの機材に関しては、GIGA スクール構想及び新型コロナウイルス感染症対策の一環として附属中学校に整備された機器及び附属中学校音楽科が所有する機材を活用した。

#### 4.1.4. 事後アンケートより

生徒には、印象に残った曲とその理由、今後聴いてみたいと思う曲についてのアンケートを行った。図1はその結果をグラフ化したものとなっている。プログラムでは女声合唱、男声合唱、混声合唱が組み込まれていたが、これまで、男声合唱を鑑賞した経験の無い生徒が多く、男声重唱で演奏された《箱根八里》が印象に残ったと回答する生徒が多かった。また、《虹》（混声合唱）に関しては、NHK 全国学校音楽コンクールの課題曲に選ばれた曲でもあり、知っている生徒が多く興味を示した生徒が多かった。また、ア・カペラ作品についても、初めて聴いたという意見が多く、合唱活動に実際に取り組むこともそうだが、鑑賞すること自体に興味・関心をもった生徒が多く見受けられた。

##### 3 印象に残った曲はどれですか。(複数選択可)

175 件の回答

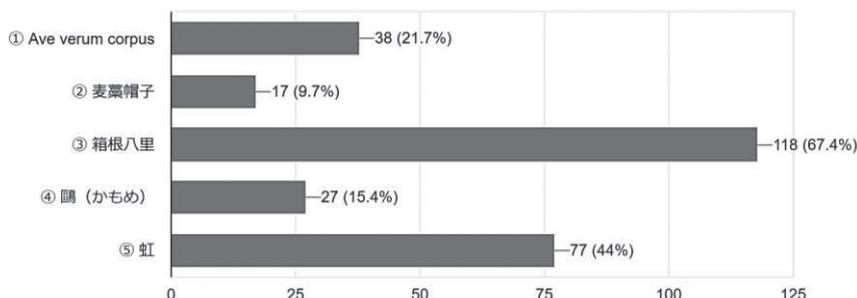


図1 事後アンケート結果 (抜粋)

## 4.2. 2021年度後期・合唱B

### 4.2.1. ミニコンサート計画案及び計画の実際

実施期日：令和4年1月27日（木）RT（16：00～16：25）

場 所：教育学部第1講義棟1階101号教室 ⇒ 事前収録・編集を行い、音楽の授業時にVTR鑑賞に変更。

実施形態：対面 ⇒ 収録

対 象：第3学年（176名）

演奏曲目：翼をください、そのひとがうたうとき、いざ起て戦人よ、  
Nobody knows de trouble I've seen、Hallelujah!

事後活動：Google フォームによるアンケート実施

### 4.2.2. 附属中学校より学部音楽科への依頼事項

対象が第3学年ということもあり、近年実施できていなかった卒業合唱を生徒にイメージさせるために、第3学年生徒が毎年取り組んでいる《大地讃頌》《Hallelujah!》より、《Hallelujah!》をプログラムに組み込んでもらうよう依頼した。

### 4.2.3. 実際の演奏発表について

新型コロナウイルス感染症の流行状況を受け、対面形式の発表を行う予定だった日時に大学施設（教育学部音楽美術科棟4階大演奏室）にて収録を行った。収録の際は、コンデンサーマイクを4本用い、補助マイクも使用することで臨場感ある音声収録を行った。また、映像に関してもビデオカメラを4台使用し、様々なアングル映像を撮影することで、収録ならではの良さが見いだせる映像を作成した。収録後は、音楽の授業時間を用いて鑑賞活動を行った。

### 4.2.4. 事後アンケートより

図2はアンケート結果をグラフ化したものとなっている。今回は、卒業合唱で取り組む《Hallelujah!》をプログラムに入れていたことから、《Hallelujah!》に関する生徒の関心が非常に高かった。ただ、残念ながら収録を鑑賞する際には、卒業合唱の中止が決まっていた。感想文には、「大学生のように力強く歌いたかった」「ハレルヤの合唱を聴くことができ、受験へ向けてのパワーをもらえた」などの記述が多く見られた。また、本校では伝統的に1・2年生が《タンホイザー行進曲》に取り組んでいることから、今後聴いてみたい曲として候補にあげる意見も多くみられた。

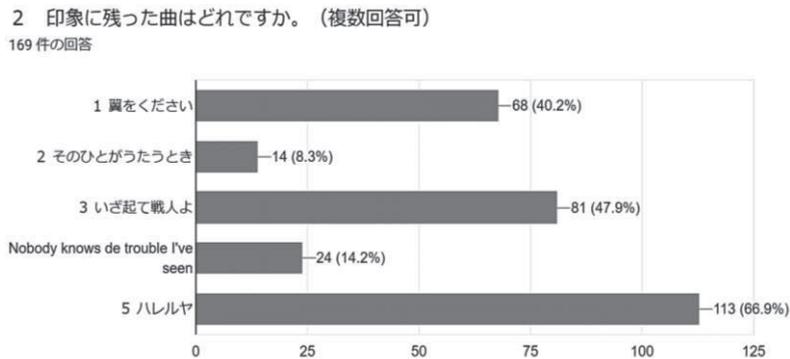


図2 事後アンケート結果(抜粋)

### 4.3. 2021年度後期・合唱Bにおける附属中学校研究授業に提供する合唱演奏の収録について

#### 4.3.1. 合唱演奏収録の実際

実施期日：令和3年12月9日(木)5限(16:10~17:40)

場 所：大学施設(教育学部音楽美術科棟4階大演奏室)

実施形態：収録

対 象：第1学年における附属中学校音楽科実践授業(1年2組)

演奏曲目：空高く(作詞・作曲：山崎朋子)

15回の講義の途中で依頼を受け、急遽練習に取り組み、収録に臨んだものである。研究授業での活用を前提とし、音楽表現について考えさせる授業展開の参考となるように、異なる表現での演奏を行ったり、強弱記号や速度記号を大げさに表現したりした演奏等、表現の異なる複数の演奏の収録を行った。また、各パートリーダーが、練習中に気を付けた事や、パートの演奏上のポイント等を紹介する動画も収録した。

#### 4.3.2. 附属中学校音楽科実践授業\*3の実際

今回取り扱った《空高く》は、附属中学校第1学年で実施しているスプリングコンサートに向けての1年2組学級合唱の課題曲である。授業の導入時に学生による模範演奏及びワンポイントアドバイスを一斉鑑賞した。身近な存在である大学生の合唱ということで、生徒たちは非常に興味を示しながら熱心に鑑賞していた。その後、合唱における音楽表現を追求する活動において、一人1台端末を活用し、繰り返し自身の聴きたいところを鑑賞し、考えを深めることができた。また、その考えをその後のパート練習に取り入れることで、より音楽表現の充実を図ることができた。

### 4.4. 2022年度前期・合唱A

#### 4.4.1. ミニコンサート計画案及び計画の実際

実施期日：令和4年7月7日(木)RT(16:00~16:25)

場 所：附属中学校 体育館

実施形態：対面

対 象：第2学年（177名）

演奏曲目：春に、郊外にて、小景異情その六、柳河、宿命、ほらね、

事後活動：Google フォームによるアンケート実施

#### 4.4.2. 附属中より学部音楽科への依頼事項

附属中学校では、伝統的に1年次にスプリングコンサートを実施し、クラス合唱及び学年合唱を経験している。今回対象となる2年生も1年次に計画をし、練習に取り組んだ。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大のために練習半ばで中止となった。その際に学年合唱として取り組んでいた《ほらね、》をプログラムに組み込んでもらうよう依頼した。

#### 4.4.3. 実際の演奏発表について

体育館内に2年生177名を入れて、対面で実施した。合唱鑑賞会の計画が始まってから、初めての対面形式となった。新型コロナウイルス感染症対策のために、多くのサーキュレーターや冷風機を使用したため騒音もあったが、生演奏の臨場感を肌で感じることでできる演奏発表となった。

#### 4.4.4. 事後アンケートより

図3はアンケート結果をグラフ化したものとなっている。この年も、学年合唱で取り組む予定であった《ほらね、》に対する興味・関心が高い結果となった。また、合唱鑑賞会自体は2回目となる学年であったが、曲目もそうだが、合唱特有の響きや美しさについて感想を述べる生徒が多く見受けられた。「音」に対しての意識が変わりつつあるように見受けられる。このことは対面実施の大きな効果であるとも考えられる。

加えて、今回は合唱活動において大切なことや合唱の魅力について問う質問を設定したが、音の重なりや響きの美しさ、複数で協力して創り上げることの喜び等について記述する生徒が多く、合唱活動に対して意欲的に取り組みたいと考える生徒が多く見受けられた。

2 印象に残った曲はどれですか。（複数回答可）  
160件の回答

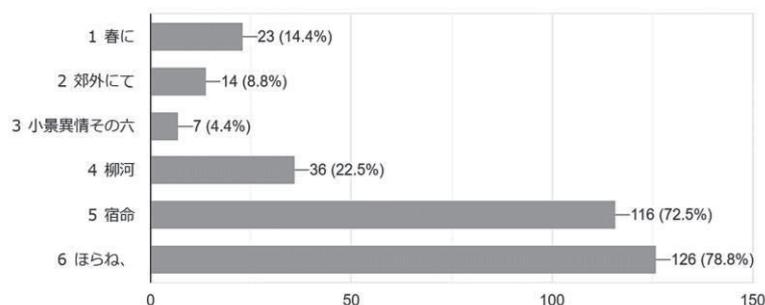


図3 事後アンケート結果（抜粋）

## 5. 実践の成果と課題

### 5.1. ミニコンサートについて

附属中学校を含め、これまでの学校現場では学校外の団体による合唱演奏を生で鑑賞するという活動は、それほど多くは行われてこなかったと考える。生徒への事後アンケートからは、本実践での企画を通して、様々な形態で合唱を鑑賞することができ、生徒は音楽の良さを「耳」を使って捉え、感じ取り、考える事ができたと考えられる。そしてその学びこそがこれから合唱活動を行う上で貴重な音楽経験となり、自らの音楽表現を高めて行くための力となり得るだろう、という示唆を得ることができた。

一方、大学生の側は、まず学習の成果を演奏会という形で発表できるという喜びにあふれていた。特に令和3、4年度入学の1、2年生は、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、高校時代ほとんど合唱ができていない、音楽授業での歌唱活動も制限されていたという学生ばかりであったため、附属中学校体育館で対面開催できた2022年前期のミニコンサートは、とても楽しく充実した演奏体験になったという結果であった。演奏者である学生の側からすると、演奏会開催という点では遠隔開催の良さも感じているが、対面開催の臨場感はより大きい充実感につながったようである。代表的な感想を次にあげる。

「今回は、最終的に附属中学校の生徒の前で歌うことができたということがやはり一番嬉しかった。1年のときはリモートと、撮影という形であったので感想を読むことによって生徒の反応・感想を知ることができていたが、今回は演奏を聴いてもらう生徒が目の前にいてマスクをしている状態ではあるが、顔を見ることができ、拍手をもらうことができたのが本当に嬉しかった。音楽の良さを改めて感じるができる機会であった。」(2022年度2年生)

### 5.2. 選曲について

中学生の事後アンケートからは、印象に残った曲として、中学生が取り組んだことのある曲、卒業式で取り組むことが決まっている曲が多く挙げられていた。中学校側の要望を調査し取り入れることは、合唱演奏を生徒に、より身近に感じてもらうことに有効であるといえる。

また2021年度2度開催した時の事後アンケートの結果、生徒からの要望が強かったポップス曲について、3回目となった2022年度前期にポップス曲《宿命》を合唱編曲したものを演奏したが、こちらもたいへん多くの生徒が印象に残った曲としてあげていた。事後アンケートの結果を反映していくことも重要であるという示唆と受け止められる。

さらに1回目、2回目の事後アンケートでは、印象に残った曲として男声合唱曲をあげる生徒も多かった。聴いたことがないという珍しさが効果をあげていたと考えられる。また男性5名による重唱であるということも印象に残る理由であると考えられる。これについては、1年次に引き続き2年次でも鑑賞することになった2022年前期の鑑賞者である中学2年生の事後アンケートで

は、印象に残った曲として男声合唱曲をあげる生徒が減少しているのが注目点である。楽曲の魅力の問題もあると考えられるが、男声のみの歌唱に慣れてきたということも考えられ、今後さらに検証していく課題となろう。

附属中学校側からみると、中学生に聴きなじみのある曲から、日本の伝統的な合唱まで幅広い曲目が1度のミニコンサートで鑑賞できることにより、様々な音楽の表情の変化などを聴くことができた。今後は、言語についてもより多くの種類の合唱曲を鑑賞することができるよう選曲を工夫できれば、言葉の美しさや特徴についても考えさせることができるのではないかと考える。

### 5.3. 附属中学校研究授業における合唱動画の活用について

附属中学校音楽科の実践研究における実証授業の際に、学生の演奏を収録したものを教材として扱った。先述したように、音楽表現について考えさせる授業を展開するために、異なる表現での演奏や、強弱記号や速度記号を大げさに表現した演奏等、表現の異なる複数の演奏の収録を行った。また、各パートリーダーに、練習中に気を付けた事や、パートのポイントなどを紹介してもらう動画も収録を行った。

実際の授業では、一斉鑑賞を行った後に、GIGA スクール構想により配付された一人1台端末(附属中学校はChromebook)を利用し、Google クラブルームを介して全生徒に動画を配付することにより、個人での鑑賞も実施した。音楽室ならではの音響設備を用いての一斉鑑賞により、臨場感や表現の違いを感じ取る事ができるとともに、個人端末を用いて自分の気になる箇所を繰り返し鑑賞することにより、表現の微妙な変化や特長に気付くことができていた。また、それら気付きの根拠等を読譜により見出したり、パートリーダーの解説動画を視聴することで新たな発見をしたりする事ができていた。

プロの演奏家による参考音源や参考動画は多数存在するが、身近な存在である大学生の演奏である事から、自分たちにも実践できるのではないかと考え、前向きに合唱活動に取り組むことのできる生徒が多く見受けられた。

授業で達成を目指す学習課題に応じて、プロの演奏と大学生の演奏とを適切に使い分けることにより、より充実した音楽学習活動が実践できると考えられる。

### 5.4. 遠隔実施と対面実施を比較して

ライブ配信や収録による遠隔実施の場合は、「音」が機械を通したものとなるため、臨場感を得ることや倍音の響きを体感させることが難しいが、収録方法の工夫や、再生機器の工夫でできる限り生演奏に近い環境を構築することにより、鑑賞活動を充実させることができた。また、遠隔実施だからこそ、対面では見ることのできないアングルであったり、繰り返し鑑賞したりするということが実現でき、その可能性はさらに引き出せると考える。

対面実施においては、なによりも同じ空間で息づかいまで感じ取る事ができるという最大のメリ

ットがある。先述したように演奏者である大学生は聴衆が眼前に存在している対面実施に、大きな喜びと充実感を感じていた。一方、生徒の事後アンケートにも次のような感想が寄せられた。「初めて目の前で大学生の合唱を聞いたけれど、やはり、画面越しと目の前で演奏は全く違うんだなと感じた。」「歌声が響いて体育館を包みこんでいました。こんなに声が響くのかと驚きました。重なりあう響きがとても美しかったです。」「久しぶりに生の合唱を聞いて感動しました。去年はリモートで直接聴くことが出来なかったけど、今年直接聴いてみて、リモートよりも迫力があり素晴らしかったです。」対面実施の有効性を十分に感じさせる感想である。

今回は新型コロナウイルス感染症の影響から距離を確保しての実施となったが、状況が改善すれば様々な鑑賞位置を設定し生徒が好きな場所から鑑賞活動を行うことも可能であると考えた。そうすれば遠隔実施で得られた鑑賞上のメリットを、対面実施にも取り入れることができることとなる。

対面、遠隔ともにメリット、デメリットが存在するため、状況に応じて柔軟に選択し、それぞれのデメリットを補うことも可能であるという示唆を、今回の取り組みを通して得ることができたと言えよう。今後、更なる形態を追究する価値について実践と検証を進めていきたい。

## 5.5. ICT 活用の効果について

ICT 機器の使用には、アナログのみでは実現不可だった、個別鑑賞や、繰り返しの鑑賞等を、簡単に実現することができるという有効性があることが、あらためて実感できた。また、同時に記録として残すこともできるため、他の演奏や事前事後の演奏などと比較を行うことも容易である。ICT 機器を活用することにより、これまでよりも多面的・多角的に音楽鑑賞を行うことができるようになるが、加えて、考えの共有なども簡単に行うことができるため、歌唱活動及び鑑賞活動に横断的に取り組むことができる点が大きな利点である。学生の演奏による教材曲の収録等さらに推進し、ICT 機器の活用と絡めて、中学音楽授業における新たな学びの在り方を追究することを課題としたい。(なお演奏収録に用いた機材については資料 2 を参照のこと。)

## 6. おわり

教育学部音楽科と附属中学校の合唱を通じた連携の実践であったが、新型コロナウイルス感染症の流行下であることもあり、奇しくも遠隔実施、対面実施の両方を試行することで、それぞれの有効性と課題点を体験的に検討することができ、多くの重要な示唆を得ることができた。また継続的に中学生に向けた演奏提供に取り組むことで、選曲の在り方についても多くの示唆を得ることができた。

今後も隣接地にあるというメリットを最大限に生かし、可能な限りミニコンサート開催を続けるとともに、合唱以外の内容についても取り組みを模索し、多角的に大学と附属中学校の連携について追究していきたいと考えている。

## 註

1. 鹿児島大学教育学部附属中学校は鹿児島大学教育学部敷地内にあり、教育学部音楽科とは徒歩 5 分で行き来できる距離である。
2. 緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置の適用時は、音楽の授業や学級での合唱など、すべての活動が禁止となった。オンライン授業実施時は曲の解説等しか行うことができなかった。音楽室等における歌唱は、鹿児島県の警戒基準及び大学の授業実施方針における感染症対策に則り、一定距離を保ち、パーテーション設置やサーキュレーターを使用することにより一部実施可能となった。
3. 本実践授業については、鹿児島大学教育学部附属中学校が令和 4 年に発行した『資質・能力を育む授業デザインハンドブック』に学習指導案等が掲載されている。特に 151 頁に収録から授業後のアンケートに至るまでの様子が書かれている。

## 謝辞

新型コロナウイルス感染症の流行下で、ミニコンサート開催にご理解、ご協力くださった鹿児島大学教育学部附属中学校のすべての教職員と生徒の皆様に心より感謝申し上げます。

## 参考文献

鹿児島大学教育学部附属中学校研究委員会（2022）、資質能力を育む授業デザインハンドブック～目標と指導と評価が一体化した授業デザインの実現に向けて～、斯文堂（株）、鹿児島

## 資料 1 ミニコンサート演奏曲等一覧

### ●2021 年度前期・合唱 A でのミニコンサート

実施日：2021 年 7 月 15 日

合唱団の構成：教育学部音楽科の 1～3 年生計 26 名と教員 1 名（作曲分野・バス担当）

ソプラノ 7 名、メゾソプラノ 7 名、アルト 6 名、男声 3 名、ピアニスト 3 名

1. Ave verum corpus 混声四部合唱 作曲：W.A.モーツァルト
2. 麦藁帽子 女声三部合唱 作詞：立原道造 作曲：三善晃
3. 箱根八里 男声四部合唱（無伴奏） 作詞：鳥居忱 作曲：滝廉太郎 編曲：林光
4. 鷗 混声四部合唱 作詞：三好達治 作曲：木下牧子
5. 虹 混声三部合唱 作詞・作曲：森山直太郎・御徒町胤 編曲：信長貴富

### ●2021 年度後期・合唱 B でのミニコンサート

実施日：2022 年 1 月 27 日

合唱団の構成：教育学部音楽科の 1～3 年生計 21 名と教員 1 名（作曲分野・バス担当）

ソプラノ 5 名、メゾソプラノ 4 名、アルト 6 名、男声 3 名、ピアニスト 3 名

1. 翼をください 混声三部合唱 作詞：山上路夫 作曲：村井邦彦 編曲：弓削田健介

2. そのひとがうたうとき 混声三部合唱 作詞：谷川俊太郎 作曲：木下牧子
3. いざ起て戦人よ 男声四部合唱（無伴奏） 作詞：藤井泰一郎 作曲：グラナハム
4. Nobody knows de trouble I've seen 女声三部合唱 黒人霊歌 編曲：石田匡志
5. Hallelujah! 混声四部合唱 作曲：G.F.ヘンデル

●2022 年度前期・合唱Aでのミニコンサート

実施日：2022 年 7 月 7 日

合唱団の構成：教育学部音楽科の 1～3 年生計 25 名と教員 1 名（作曲分野・バス担当）

ソプラノ 5 名、メゾソプラノ 7 名、アルト 6 名、男声 3 名、ピアニスト 4 名

1. 春に 混声三部合唱 作詞：谷川俊太郎 作曲：木下牧子
2. 郊外にて 女声三部合唱 作詞：室生犀星 作曲：石田匡志
3. 小景異情その六 女声三部合唱 作詞：室生犀星 作曲：石田匡志
4. 柳河 男声四部合唱（無伴奏） 作詞：北原白秋 作曲：多田武彦
5. 宿命 混声三部合唱 作詞・作曲：藤原聡 編曲：田原晴海  
原曲：Official 髭男 dism
6. ほらね、 混声四部合唱 作詞：伊東恵司 作曲：松下耕

※石田匡志は教育学部音楽科の教員、作曲分野担当。

※3 回とも男声合唱曲の演奏は、学生 3 名に教員 2 名（合唱講義担当者と作曲担当教員）の計 5 名による重唱で行った。

## 資料 2 収録時に用いた機材一覧

### (1)コンデンサーマイク

- ・ behringer B-1 2 本（写真 1）
- ・ behringer B-5 2 本（写真 2）



写真 1



写真 2

### (2)オーディオミキサー

- ・ ZOOM LiveTrak L-8 1 台（写真 3）



写真 3

### (3)ビデオカメラ

- ・ Panasonic HC-VX985M 1 台
- ・ Panasonic HC-V480MS 1 台
- ・ SONY HDR-CX680 1 台

### (4)ビデオスイッチャー

- ・ Blackmagicdesign ATEM Mini 1 台（写真 4）



写真 4

### (5)PC

- ・ Apple MacBookAir13 1 台